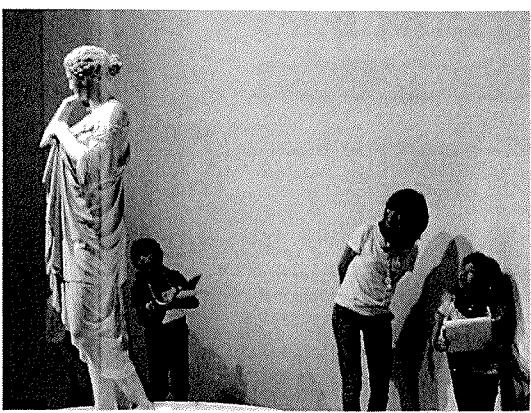


今の社会で、人々がもっとも関心ある「解決しなければ感じている」ことのひとつは、「それぞれの人が社会生活の中で簡単に孤立してしまいやすいこと」ではないでしょうか。あの3月11日の大震災以降ニュースなどで聞くたびに、私たちがそのことを随分と考える機会がありました。人々が互いに孤立しないために重要な事は2つあります。ひとつは誰かと関わる機会を持ちつづけること、つまり「参加」をする事。そして2つ目は、参加を楽しむ感性を発展させ、今度は参加を誘う「つなぎ手」になることです。このつなぎ手となる気持ちを持つた人々が世の中に増えたら、私たちの不安はもう少し減っていくのかもしれません。



今夏行われた「ルーブル美術館展」で展示室を冒險する
アート・エデュケーターと子供たち

アートが促す「参加」と「包摶」

切だとわかつていても、人々のライフスタイルが多様化する中で、その多

様性を受け止められるようになれば義務的でない」「自然と対話ができる「つなぎ手」になることです。このつなぎ手となる気持ちを持つた人々が世の中

に増えたら、私たちの不安はもう少し減っていくのかもしれません。ただ、参加する事が大

きだとわかつていても、人々は「つなぎ手」になることです。このつなぎ手となる気持ちを持つた人々が世の中

新美術時評

— 美術と教育(11) —

いなにわさわこ
稻庭彩和子

連携し、始めました。

そのひとつ「とびらプロジェクト」

では、一般から募った約120名の

市民がアート・コミュニケーター(愛

称: とびら)として、ユニークな

活動を開催しています。とびらは美術館の

無償の活動ですが、彼らは美術館の

サポートという位置づけではなく

プレイヤーです。美術館の学芸員や

大学の教員とともに、美術館を拠点

として、文化や社会への「参加の回

路」を作っていく主体的なつなぎ手

になります。これまで学校と連携し

た授業「スペシャル・マンデー」や、

いコミニケーションの回路を求め

つつも、使い慣れた回路のなかでた

たずんでしまったことがあります。

そこでアート、そして美術館の出

も一緒に造形や鑑賞活動をする「の

路」を作っていく主体的なつなぎ手

になります。つまり展示作品には、こ

の世へ自ら参加してい

る別の人間の主体的な意志が積み重なっています。美術館に展示される展示物と

なります。つまり展示作品には、こ

の世へ自ら参加してい

る別の人間の主体的な意志が積み重

なって宿っているので

こうとする主体的な工

ネルギーが幾重にも重

なって宿っているので

こうとする主体的な工